

注7 中西進「感愛の誕生」(『中西進万葉論集 第六卷』講談社一九九五、初出一九六六)。

注8 品田悦一「大津皇子・大伯皇女の歌」(『万葉の歌人と作品 第一巻』和泉書院、一九九九)。

注9 阪下圭八「皇子・皇女の相聞」(『初期万葉』平凡社、一九七八、初出一九七二)。

注10 伊藤博「女帝と歌集」(『万葉集の構造と成立下』塙書房、一九七四、初出一九六七)。

注11 小川靖彦「始原としての天智朝―『萬葉集』卷二の成立と編集(その二)〈書物としての『萬葉集』〉―」(『青山語文』三四、二〇〇四)。

注12 伊藤博「宮廷ロマンス」(『万葉集相聞の世界』塙書房、一九五九)。

注13 鐘江宏之「日本の「歴史」の始まり」(『律令国家と万葉ひと』小学館、二〇〇八)。

注14 福沢健「孝徳紀大化五年三月是月条の語るもの―建皇子の母の死を語る物語―」(『記紀・風土記論究』おうふう、二〇〇九)。

注15 都倉前掲論文2など。

注16 川口常孝「あかときつゆ」(『万葉集作家の世界』桜楓社、一九七二)。

注17 小野寺静子「ひそかに」考」(『札幌大学教養部女子短大部紀要』一八B、一九八一)。

注18 野家啓「物語としての歴史―歴史哲学の可能性と不可能性―」(『物語の哲学』岩波書店、二〇〇五、初出一九九三)。

子であることを確認するものであった。一一一一二番歌は、巻二相聞部持統朝が描く草壁皇子中心の体制の始原となる六皇子誓約を、現在につながる過去である「古」として回想するものであった。大津皇子歌群の後に、一一一一二番歌が置かれることによって、大津皇子歌群によって示された草壁皇子中心の体制とは、天武天皇の遺志を継承するものであることが再確認される配列と成っているのである。

七 まとめ

野家啓一（注18）は、「歴史哲学のテーゼ」として、

- (1) 過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものである「歴史の反実在論」
- (2) 歴史的出来事(Geschichte)と歴史叙述(Historie)とは不可分であり、前者は後者の文脈を離れては存在しない「歴史の現象主義」
- (3) 歴史叙述は記憶の「共同化」と「構造化」を実現する言語的制作(ポイエーシス)に他ならない「歴史の物語論」
- (4) 過去は未完結であり、いかなる歴史叙述も改訂を免れない「歴史の全体論(ホーリズム)」
- (5) 「時は流れない。それは積み重なる (Time does not flow it accumulates from moment to moment)」[サントリー・テーゼ]
- (6) 物語りえないことについては、沈黙せねばならない「歴史の遂行論(プラグマティックス)」

の六箇条を挙げているが、巻二相聞部によって語られている天智朝・天武朝・持統朝は、編纂時（おそらく元明朝）における「想起」を通じて解釈学的に再構成された、記憶の「共同化」と「構造化」を実現する「言語的制作」に他ならない。このような歴史を語るテキストが歴史を再生産しながら流通していくことによって、草壁皇子と、その血統を受け継いだ文武

天皇、そして将来の天皇である首皇子の正当性が繰り返し語られたのである。大津皇子歌群の持つ物語的な配列は、その形成が編纂時になされたという立場から考えると、編纂時における解釈学的な「想起」による再構成の中から生み出されてきたものであると理解されるのである。

従来、大津皇子歌群の物語性は、万葉集の外部にある大津皇子の口承の物語（歌語り）に関わる問題として考えられてきた。外部にある口承の物語を想定することによって、大津皇子歌群は巻二相聞部全体の文脈と切り離されてきたのである。歌集から歌を切り離して歌の生誕を考察する方法は、一定の成果を挙げてきた。しかし、歌集の文脈から切り離すことによって、逆に見えなくなっていた部分があるのも事実である。大津皇子歌群についていえば、巻二相聞部が語ろうとする歴史との関連から見えていくことによって、従来の「歌語り」論では見落とされてきた意味、すなわち、草壁皇子の正当性を語るという意味が、見えてくるのではないだろうか。

- 注1 伊藤博「歌群の物語性」（『万葉集の表現と方法 上』塙書房、一九七五）など。
- 注2 都倉義孝「大津皇子とその周辺」（『万葉集講座 第五巻』有精堂、一九七三）。
- 注3 益田勝実「『上代文学史稿』案（二）」（『日本文学史研究』四、一九四九）。
- 注4 伊藤博「歌語りの世界」（『万葉集の表現と方法 上』塙書房、一九七五、初出一九六二）。
- 注5 神野志隆光「伊藤博氏の「歌語り」論をめぐって」（『柿本人麻呂研究』塙書房、一九九二、初出一九七七）、益田勝実「有由縁歌」（『万葉集講座 第五巻』有精堂、一九七三）。なお、「歌語り」論の研究史については、身崎壽「『歌語り』の時代」（『万葉集の今を考える』新典社、二〇〇九）に詳しい。
- 注6 この点については、福沢健「大津皇子歌群の形成」（『國學院雑誌』九〇―一、一九八九）に詳しく述べた。

容姿佳麗し。見る者、自づからに感でぬ。同母妹軽大娘皇女、亦艶妙し。太子、恒に大娘皇女と合せむと念す。罪有らむことを畏りて黙あり。然るに感でたまふ情、既に盛にして、殆に死するに至りまさむとす。…(中略)…遂に竊に通けぬ(遂竊通)。乃ち怛懷少しく息みぬ。

允恭紀二十三年条は、万葉集の九〇の左注に引用されている。小野寺静子(注17)は、万葉集の「ひそかに」(一〇六を除く)が許されない結婚に対して用いられること、また、その用字が「竊」のみで全く異体字を持たないことに注目して、「紀の、許されない結婚に「ひそかに」とあるのは、もともと『ひそかに』がなかった伝承に、密通―罪―罰という法社会化した現実の世を反映させた、紀編纂者の挿入による。『万葉集』の「ひそかに」が紀の軽郎(ママ)皇女物語の「竊」を規範とするもので、もともと原万葉に「竊」があったとは考えられない。密通物語風に仕立てたのは九〇番左注を施した編者、ないしその後、手を加えた編纂者の仕業である」と、大津皇子歌群の「竊」が允恭紀二十三年条を規範として編纂段階で付加された可能性を指摘している。大津皇子歌群において、大津皇子と石川女郎との「婚」は、編纂段階で付加された「竊」によって反社会的なものとして位置づけられ、大津皇子はその反社会的な行為によって、木梨軽皇子と同様、天皇として即位するにふさわしくないことが語られているのである。

なお、A(一〇六)の「竊下」は、大津皇子の伊勢下向が「竊」であることを記すものである。川口は一〇六の「竊」についても同母姉弟である大伯皇女と大津皇子との「密通」があったというニュアンスが封じ込められていると説いているが、「竊」が用いられていることのみによって、ここに同母姉弟間の恋愛を読み取るのは難しい。Aで「竊」が用いられているのは、大津皇子の伊勢下向が反社会的行為であるということを表すためであると考えるのが穏やかであろう。一〇六の「竊」は「密通」を表していないが、大津皇子歌群で「竊」が繰り返されるのは、ここで大津皇子の行為の反社会性が強調されているのであると考えたい。

大津皇子が皇位継承者として不適格であることが強調することは、逆に

草壁皇子の存在を浮かび上がらせることになる。このような意味を持つ大津皇子歌群が、巻二相聞部持統朝の冒頭に置かれることによって、持統朝に載せられる天智天皇・天武天皇の両方の血統を引く皇子・皇女たちの中心は、草壁皇子であることが示されているのである。先に述べたように、大津皇子歌群が形成されたのは、巻二相聞部の編纂段階であると考えられる。持統朝の中心に草壁皇子を据えるために、巻二相聞部の編者は大津皇子の反道徳的な行為を語る物語を作り出した。天智朝において、天皇家と藤原家との始原を語る物語を作り出すために九一〜九五番歌が物語的な歌群として編集されたことを述べたが、同様に大津皇子歌群も、持統朝において、草壁皇子を中心とする体制の始原を語る物語を作り出すために編集されたと考えたい。巻二相聞部で大津皇子歌群が物語的に配列された背景には、巻二相聞部の持つ強い政治意識が存在するのである。

大津皇子歌群によって示された草壁皇子中心の体制が、天武朝を継承するものであることを示しているのが、この歌群に続く弓削皇子と額田王との贈和歌(211〜212)である。

吉野の宮に幸しし時、弓削皇子、額田王に贈る歌一首

古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡り行く(211)

額田王、和へ奉る歌一首 大和の都より奉り入る

古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如(212)

一一一〜一二番歌で回想されている「古」は、「弓絃葉」を契機として回想されている。「弓絃葉」は、新しい葉が成長すると古い葉が落ちることから、「譲り(讓位)」を暗示する。吉野と讓位が関わる「古」とは、多田一臣『万葉集全解』筑摩書房(二〇〇九)に「古」について「『イニシヘ』は「往にし方」で、現在にまでつながると意識される過去。類語「ムカシ」は、断絶の意識がある。天武八年(六七九)の「行幸時」とあるように、天武八年五月の吉野行幸を指す。この時の吉野行幸においては、先に触れた六皇子盟約が行われた。六皇子盟約は、天武天皇の後継者が草壁皇

たことが分かる。巻二相聞部がこのような編集を行ったのは、持統朝が天智朝・天武朝を引き継ぐものであるという歴史認識を示すものである。この政治的な意図は、持統朝に載せられる皇子・皇女のグループに⑤の但馬皇女が加えられていることから、見て取ることができる。但馬皇女は、藤原鎌足の娘である水上娘を母とする皇女である。皇族を父母とする皇子・皇女に交じって、一人だけ臣下である藤原家出身の女性を母とする但馬皇女がいるのは、持統朝においても天皇家と藤原家との深い関係が続いていることを示すためであろう。それは、天智朝・天武朝で繰り返し示されてきた歴史認識の継承である。但馬皇女は、天智朝・天武朝と持統朝とをつなぐものとして、持統朝の皇子・皇女のグループに加えられているのである。

六 大津皇子歌群の政治性

巻二相聞部に示されている歴史認識とは、持統朝は天智朝・天武朝を継承するものであるというものであった。このような歴史認識の下に、天智天皇・天武天皇の両方の血統を引く皇子・皇女が名を連ねる。その筆頭として巻二相聞部冒頭に置かれているのは、大津皇子と草壁皇子である。大津皇子の母である太田皇女も草壁皇子の母である鷗野皇女(持統天皇)も、蘇我石川麻呂の遠智娘である。孝徳紀大化五年三月は月条には、皇太子(天智天皇)が最も愛した妃は遠智娘であることを語る歌物語が載せられている(注14)。この歌物語は、遠智娘が生んだ太田皇女・鷗野皇女・建皇子が天智天皇の皇子・皇女の中で最もすぐれた存在であることを始原的に語るものである。巻二相聞部持統朝冒頭に大津皇子と草壁皇子の歌が据えられるのは、この二皇子が遠智娘の生んだ太田皇女・鷗野皇女の皇子であったからである。つまり、大津皇子も草壁皇子も、共に天智天皇の最も正当な孫なのであった。最も正当である皇子同士の妻争いを語る大津皇子歌群は、巻二相聞部の文脈から切り離れた場合、大津皇子の悲劇を語ることによって大津皇子の鎮魂を目的とするというような解釈(注15)も可能と

なるが、首皇子の正当性を述べようとするという巻二相聞部全体の文脈で考えるならば、そこに名を連ねる天智皇女所生の天武皇子の中で最もすぐれた存在が首皇子の祖父である草壁皇子であることを述べるという政治的な意味から解釈していく必要がある。

大津皇子歌群において特徴的なのは、AとCの題詞に「竊」という字が用いられていることである。川口常孝(注16)は、万葉集中で用いられる「竊」(2九〇、2一〇六、2一〇九、2一六、12三〇九八、16三八〇三、16三八〇六)がA(一〇六)を除いて、いずれも「密通」の語義をもつて使用されていることを指摘している。すなわち、九〇が「竊通」、一一六が「竊接」、三〇九八が「竊嫁」、三八〇三が「竊為交接」、三八〇六が「竊接」というように、いずれも男女の交接関係を表す動詞と副詞「竊」が結びつくことで、その男女の関係が社会的に許されないものであることを示している。C(一〇九)についても、「竊」が用いられることによって、大津皇子と石川女郎との「婚」が社会的に許されないものであること、だからこそその恋は津守通の占いによって顕わされなければならないものであることが示されている。大津皇子と石川女郎との「婚」が反社会的であるとされる理由については、しばしば2一〇を取り上げながら石川女郎が草壁皇子の思い人であったからだと説明されるが、一人の女性を巡って複数の男性が争うことがそのまま反社会的な行為となるわけではないだろう。大津皇子と石川女郎との「婚」が反社会的であったから「竊」が用いられたのではなく、大津皇子と石川女郎との「婚」を反社会的なものに仕立てるために「竊」が用いられている。つまり、大津皇子歌群は、「竊」を用いることによって、大津皇子の恋が反社会的な行為として意味づけられているのである。「竊」によって表される反社会的行為が皇子の即位を阻む条件として納得され得るものであったことは、允恭紀二十三年条に、木梨輕皇子の同母妹輕太娘皇女との「竊通」によって、太子は即位を阻まれたとする記事があることから分かる。

二十三年の春三月の甲午の朔庚子に、木梨輕皇子を立てて太子とす。

なっていないのが現状であるが、巻二相聞部もまた天武・持統期の国家観を維持するための装置として編集され、流通していったであろうことは、小川の指摘するような強い政治的意図が天智朝・天武朝の編集作業から認められることから推測することができよう。そこで、次に持統朝に載せられる歌について検討し、持統朝が天智朝・天武朝を引き継ぐものとして描かれていることを確認したい。

五 持統朝の歌の政治性

持統朝においては、天皇の贈答歌が載せられていない。代わりに天武天皇の皇子・皇女の歌が収められているのがその特徴である。持統朝に歌が載せられている皇子・皇女及びその系図を、順に示すと次のようになる。

① 大伯皇女（二〇五・一〇六）

（母方曾祖父） 蘇我石川麻呂―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 遠智娘―（父） 天武天皇・（母） 太田皇女―大伯皇女

② 大津皇子（二〇七・一〇九）

（母方曾祖父） 蘇我石川麻呂―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 遠智娘―（父） 天武天皇・（母） 太田皇女―大津皇子

③ 草壁皇子（二一〇）

（母方曾祖父） 蘇我石川麻呂―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 遠智娘―（父） 天武天皇・（母） 鷗野皇女―草壁皇子

④ 弓削皇子（二一一）

（母方曾祖父） 忍海造小竜―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 忍海造色天子娘―（父） 天武天皇・（母） 大江皇女―弓削皇子

⑤ 但馬皇女（二一四・二一六）

（母方祖父） 藤原鎌足―（父） 天武天皇・（母） 氷上娘―但馬皇女

⑥ 舍人皇子（二一七）

（母方曾祖父） 阿倍倉内麻呂―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 阿

部橘娘―（父） 天武天皇・（母） 新田部皇女―舍人皇子

⑦ 長皇子（二三〇）

（母方曾祖父） 忍海造小竜―（母方祖父） 天智天皇・（母方祖母） 忍海造色天子娘―（父） 天武天皇・（母） 大江皇女―長皇子

①～⑦を見ると、持統朝に歌を載せる皇子・皇女は全て天武天皇の皇子・皇女であること、また、⑤の但馬皇女を除いて、すべて天智天皇の皇女を母とすることに気づく。天智天皇の皇女を母とする天武天皇の皇子・皇女を天武紀二年二月条の記載順に示すと、草壁皇子・大来皇女・大津皇子・長皇子・弓削皇子・舍人皇子となる。これを①～⑦と照合してみると、草壁皇子は③、大来皇女は①、大津皇子は②、長皇子は⑦、弓削皇子は④、舍人皇子は⑥というように、巻二相聞の持統朝においては天智天皇の皇女を母とする天武天皇の皇子・皇女が網羅されていることが分かる。

巻二相聞の持統朝に天智天皇の皇女を母とする天武天皇の皇子・皇女が集中して表れる理由は、当時有力な皇子・皇女が天智天皇・天武天皇の血筋を引く皇子・皇女であったからという理由だけでは説明できない。天武紀八年五月条には、吉野宮における六皇子盟約のことが記される。六皇子盟約に参加した皇子は、草壁、大津、高市、河嶋、忍部、芝基であった。六皇子が盟約のメンバーとして選ばれたのは、天武天皇の崩御後の有力な皇子と目されていたからであろう。ところが、この六皇子の中で①～⑦に含まれるのは、草壁皇子と大津皇子しかない。河嶋皇子・芝基皇子は天智天皇の皇子であった。高市皇子と忍部皇子は、天武天皇の皇子であったが、母が天智天皇の皇女ではない。当時有力な皇子であっても、天智天皇の皇女を母としている天武天皇の皇子・皇女でなければ、巻二相聞部持統朝に載せられていないのである。これは、巻二相聞部の描く世界が、単純な現実の反映ではなく、ある政治的意図によって生み出されたテクスト空間であることを示している。

以上の点から見て、巻二相聞部の編者が、天智天皇の皇女を母としている天武天皇の皇子・皇女たちの歌を意識的に集めて、持統朝の編集を行っ

(2九三)

内大臣藤原卿報贈鏡王女歌一首

玉くしげみむろの山のさなかつらさ寝ずはつひにありかつましじ【或る本の歌に曰はく、玉くしげ三室戸山の】(2九四)

ウ 内大臣藤原卿娶采女安見児時作歌一首

われはもや安見児得たり皆人の得難にすとふ安見児得たり(2九五)

右のア・イ・ウについては、ア・イ・ウが一連となつて、「天皇と王女、王女と鎌足、鎌足と采女」という関係で、一つの恋物語が形作られているという(注12)。アとイが並べられることによって、天智天皇は、寵愛していた鏡王女を鎌足に譲ったということが語られる。それは、天皇と鎌足との特別の関係を指し示すものである。さらに、そこに、鎌足に采女が下賜されたことを語るウが加えられることによって、天皇と鎌足との特別な関係がさらに強調される配列となつている。天智天皇と藤原鎌足との深い関係を語ることは、後世へと続いていく天皇家と藤原家との深い関係の始原を語るものである。

このような意味を持つア・イ・ウが本来一連の歌群ではなかったことは、注意しておく必要がある。題詞の形式を見ると、ア・イが「歌」型題詞であるのに対して、ウは「時々作歌」型題詞となつている。ア・イ・ウは、別々に記載された資料を編集するかたちで、物語的に配列がなされた歌群なのである。その配列は、大津皇子歌群と同様、巻二相聞部の編集段階において行われたと推測される。巻二相聞部は、歌群を物語的に編集していくことによって、天皇家と藤原家との始原の物語を作り出しているのである。

続く天武朝には、天武天皇と藤原夫人(五百重娘)との贈答歌が載せられている。

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

わが里に大雪降り大原の古りにし里に落ちまくは後(2一〇三)

藤原夫人、和へ奉る歌一首

わが岡のおかみに言ひて落らしめし雪の摧けしそこに散りけむ(2一〇四)

天武天皇と藤原夫人との親密な贈答によつて、天智朝同様に天武朝も、天皇家と藤原家との関係は深いものであったことを語るために、巻二相聞部はこの二首を天武朝の歌として配したのであろう。天智朝において示された天皇家と藤原家との関係の始原の物語を引き継ぐものとして、天武朝の歌はある。

天智天皇の時代を引き継ぐものとして、天武天皇の時代があるという歴史認識は、日本書紀に示されているものである。天武天皇は、天智天皇が後継者として指名した大友皇子と壬申の乱を戦つた。この経緯を考えれば、天武王朝の起源を記す日本書紀において、天智天皇に対する否定的な記述がなされてもおかしくない。しかし、天智天皇の業績は、藤原鎌足の業績と共に、正当化されて描かれている。鐘江宏之(注13)は、日本書紀の天智天皇と藤原鎌足の記述について、日本書紀が企画され編集作業が行われた持統天皇・藤原不比等体制の由来を語るものとして、持統天皇の父である天智天皇と藤原不比等の父である藤原鎌足の業績は、それぞれ肯定的に記述されたことを述べている。さらに、このような歴史認識に基づいて編集された日本書紀の役割については、養老五年(七二一)以降繰り返し行われた講書などを通して、その歴史認識を再生産しながら、天武・持統体制期の国家観を維持していくために、「今」の政治体制を擁護するものとして機能し続けたと説く。

巻二相聞部が、主として天智天皇・天武天皇・持統天皇の三代の天皇の時代の歌によつて成つていていることは、持統朝は天皇家と藤原家との深い関係によつて成り立つところの天智朝・天武朝を引き継ぐものである、という歴史認識が示されていると考えられる。このような巻二相聞部の歴史認識は、鐘江が指摘した日本書紀の歴史認識と共通するものである。巻二相聞部がどのような目的で作られ、どのような場で受容されたのかは明確に

A・CにB・Dが増補されたのは、この歌群で石川郎女を巡る大津皇子と草壁皇子との妻争いを語ろうとしたためであろう。大津皇子歌群は、阪下圭八(注9)が述べたように、「伝統的な語りごとの二つの型」である「妻争い譚」と「同母の兄弟・姉妹間の愛情譚」とをかなり忠実に踏襲するものである(「同母の兄弟・姉妹間の愛情譚」については疑問がある。後述)。ところが、原集団のA・Cだけでは、「同母の兄弟・姉妹間の愛情譚」はともかくとして、「妻争い譚」を語ることができない。大津皇子と妻争いをしたのが草壁皇子であることは、Dがあることによつてはじめて明らかになる。Dの増補がなければ、妻争い譚は成立しないのである。

卷二相聞部が編纂される以前に石川郎女を巡る大津皇子と草壁皇子との妻争いの話が流布していたかどうかは、不明としか言いようがない。仮にそのような話が流布していたとしても、その話を採用して、歌に物語的な配列を加えたのは卷二相聞部の編者である。大津皇子歌群の物語性は、万葉集の外部にある大津皇子の口承の物語の問題ではなく、卷二相聞部というテクストの問題として理解すべきなのである。大津皇子と草壁皇子の歌を物語的に配列することの意味は、卷二相聞部の文脈から考えていく必要があるだろう。

三 万葉集卷二の編集方法

万葉集卷二の成立については、伊藤博(注10)が、元明天皇が天皇晩年もしくは上皇時代、すなわち和銅五年(七一二)～養老五年(七二二)に、持統天皇の遺志を継ぐかたちで、「白鳳宮廷ロマンス歌集」として編まれたものであると説いている。さらに、伊藤は、卷二を皇子・皇女を直接の対象とした、作歌を学ばせ、人間の生き方や情操を弁えさせるための教養書であると捉え、「天武宮廷の発展とそのために必要な強力な後継者の出現とを、格別に待望した」元明期においては特に首皇子(聖武天皇)を読者として意識していたと述べる。

この伊藤説に対して、小川靖彦(注11)は、卷二原形部の編集方法には

「強い政治的意図」を認めることができると説く。伊藤が首皇子を「天武天皇の強力な後継者」であるとしたのに対して、小川は「首皇子は無前提に天武天皇・持統天皇の後継者であったのではなく、正当な後継者であるためには、六、七世紀の慣例とは異なり、臣下出身の女性を母とするというハンディ」を持つと捉えた。そして、首皇子のハンディを克服して、天皇として即位させることが、元明朝に固有な政治的課題であるとした上で、卷二原形部は「新たな皇位継承の論理を組み立て、これについての、皇族、廷臣たちの合意形成を得るべく編集された」という見方を示している。この「新たな皇位継承の論理」とは、元明朝の始原を天智朝と位置づけ、天武皇子の中でも、草壁皇子・文武天皇と二代にわたって天智皇女(持統・元明)を母とする血統がいかに卓越した存在であるかを主張するものであったという。本稿では、この小川の意見に従いつつ、卷二相聞部における大津皇子歌群の意味を考えていきたいと考える(万葉集卷二の編纂過程については、明らかにしておらず、相聞部と挽歌部とがどのような関係になっているか明確でない。本稿では、相聞部に限定して考察を進める)。

四 天智、天武朝の歌の政治性

そこで、まず天智朝・天武朝の歌を見ていくことによつて、その政治性を確認したい。天智朝の冒頭には、天智天皇・藤原鎌足・鏡王女・安見兒を巡る歌群が載せられている。

ア 天皇賜鏡王女御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらし【一に云ふ、妹があたり継ぎても見むに。一に云ふ、家居らましを】(291)

鏡王女奉和御歌一首

秋山の樹の下隠り逝く水のわれこそ益さめ思ほすよりは(292)

イ 内大臣藤原卿、娉鏡王女時、鏡王女贈内大臣歌一首

玉くしげ覆ふを安みあけて行かば君が名はあれどわが名し惜しも

つ物語的な配列は、それが「歌語り」の反映でないとなると、どのように理解すべきなのか。本稿では、大津皇子歌群の歌々の表記の違い、題詞の書式に注目して、この歌群が本来別々の資料を編集するかたちで、物語的な配列が与えられていることを、まず述べたいと思う。次に、このような資料の編集を行い得たのは『万葉集』巻二編纂のレベルであることを確認した上で、大津皇子歌群の語ろうとすることその歌群が巻二相聞部持統朝の冒頭に置かれた意味について、記載されたテキストの問題（特に巻二相聞部の問題）として考えてみたい。

二 大津皇子歌群の表記及び題詞の書式

最初に、基礎的な作業として、大津皇子歌群を構成するA・B・C・Dにおける表記及び題詞の書式の差異について確認しておきたい（注6）。

表記上の差異としてまず挙げられるのは、石川郎女と石川女郎の違いがある。万葉集中のイラツメ「郎女」「女郎」は、一般的に厳密に使い分けが見られる。たとえば、大伴坂上郎女の場合、万葉集中の五十三例全て「郎女」と表記されている。ところが、大津皇子歌群において、石川イラツメは、Bでは石川郎女と記され、C・Dでは石川女郎と記される。Bの石川郎女とC・Dの石川女郎とを別の人物と考えることはできないので、大津皇子歌群の中では「郎女」「女郎」の表記が混乱していることが分かる。大津皇子歌群における「郎女」「女郎」の表記の混乱は、BとC・Dとが異なる場において記載されたため生じたのであると推測される。同じ場で記載されていたならば、統一するはずだからである。石川郎女・女郎の表記の混乱は、BとC・Dとが別個の資料としてあったことを示している。

また、「郎女」「女郎」の表記の違いに対応するものとして、Bの助詞の表記がA・C・Dと異なることが挙げられる。例えば、「に」の仮名であるが、Bにおいては「山之四付二」（2108）「山之四附二」（2109）というように「二」と記されるのに対して、A・C・Dにおいては「鶏鳴露尔」（2105）「津守之占尔」（益為尔知而）（2209）「彼方野邊尔」

（2110）というように、「尔」と表記される。同じことは、「と」についても言える。「と」は、A・Cにおいては「倭邊遣登」（2105）「将告登波」（2109）というように「登」が用いられているのに対して、Bにおいては「妹待跡」（2107）「吾乎待跡」（2108）というように「跡」が用いられている。

大津皇子歌群には、表記上の差異のほかに題詞の形式の差異もある。中西進（注7）は、巻二の題詞を「く時く作歌」型題詞と「く歌」型に分類した上で、「く時く作歌」型題詞を持つグループを原集団、「く歌」型題詞を持つグループを増補であると説いた。大津皇子歌群の題詞を見てみると、AとCの題詞は「く時く作歌」型であり、BとDの題詞は「く歌」型である。この題詞の型式と共に注意しておきたいのは題詞の内容で、「く時く作歌」型のA・Cの題詞は作歌状況をよく説明しており、「く歌」型のB・Cの題詞は作者と歌を贈った相手の名を記すのみで、作歌状況については語らない。「く時く作歌」型題詞と「く歌」型題詞の間には歌の作歌状況に対する態度に差異が見られ、両者の相違は単に型式の相違にとどまらず、その記述内容にも及んでいる。

前述した表記の相違と題詞の形式の相違とを併せ考えると、大津皇子歌群の歌々は、最初からA・B・C・Dが統一された歌群のかたちであったのではなく、各群はそれぞれ別個に記載された歌であったことが分かる。すなわち、大津皇子歌群は一つの「歌語り」として語られていたものではなく、別々に記載された歌が物語的に配列されたものであることは、表記と題詞から確認することができる。このような物語的な配列による編集作業行われたのは、品田悦一（注8）が「いずれにせよ、六首が巻二の編纂以前に一括されていた形跡は認められない以上、物語を編み上げたのは編者と見るほかはない」と述べるように、万葉集巻二相聞部の編纂段階であると考えられる（巻二の相聞部と挽歌部との関係は当然問題となるが、挽歌部にまで言及すると問題が拡散してしまうので、本稿では相聞部に話題を限定したい）。巻二相聞部の編纂段階で、原集団としてあったA・CにB・Dが増補されるかたちで、大津皇子歌群は形成されたのである。

大津皇子歌群の語るもの ― 歌集が織りなす歴史 ―

福 沢 健

Manyoshu Weaves History: The Meaning of the "Prince Ohtsu" Songs

Takeshi Fukuzawa

(二〇一〇年十一月二十六日受理)

- A 大津皇子竊下於伊勢神宮上來時大伯皇女御作歌二首
 吾勢祐乎 倭邊遣登 佐夜深而 鷄鳴露尔 吾立所霽之 (2105)
 ふたりいけど 去過難寸 秋山乎 如何君之 独越武 (2106)
 二人行杼 去過難寸 秋山乎 如何君之 独越武 (2106)
- B 大津皇子贈石川郎女御歌一首
 足目木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二 (2107)
 あしひきの 山のしづくに 妹まつと あれたちぬれぬ 山のしづくに (2107)
- C 大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子御作歌一首 未詳
 大船之 津守之占尔 將告登波 益為尔知而 我二人宿之 (2109)
 おおふねの つ守のうらに のらむとは まさしにりて わがふたりねし (2109)
- D 日並皇子尊贈賜石川女郎御歌一首 女郎字曰大名兒也
 大名兒 彼方野辺尔 荇草乃 束之間毛 吾忘目八 (2110)
 おおなごを をちかたのへに かるかやの つかのあいだも あれわすれめや (2110)

一 問題点の所在

本稿で取り扱う大津皇子歌群とは、『万葉集』巻二相聞部の持統朝の冒頭に載せられる一〇五〇番歌を指す。この大津皇子歌群が物語的な配列を持つこと、その物語が天武紀や持統称制前紀に載せられる大津皇子謀反事件と関わるものであることについては、多くの論者が一致して認め

るところである(注1)。大津皇子歌群が物語的な配列を持つ理由については、その背後に大津皇子の物語を語る「歌語り」が存在したからであるという意見が有力であった(注2)。つまり、「歌語り」の語り手が、大津皇子に關係する歌々を物語的に配列し、それを口承の物語として語り、その「歌語り」が反映されたかたちで記載されたと考えるのである。「歌語り」とは、益田勝実が平安時代の「歌物語」の前段階のものとして想定した、歌中心の口承の説話を指す(注3)。伊藤博は、益田が提唱した「歌語り」の發生を持統朝に引き上げ、持統朝の宮廷サロンにおいて語られた「歌語り」を集めたものが万葉集巻二の相聞部に見られる「宮廷ロマンス」であるという考えを示した(注4)。その後、「歌語り」は、神野志隆光や提唱者であった益田からの批判があつたこともあり、現在ほぼ忘れられたような状況にある(注5)。大津皇子歌群についても、「歌語り」論が顧みられなくなつていく課程で、物語的な配列があることは認めるものの、その背後に「歌語り」の存在を想定する意見は姿を消している。仮に大津皇子歌群の外部に「歌語り」が存在したとしても、その存在を確認することができない以上、水掛け論に陥ってしまうだろう。

ただし、「歌語り」論が衰退してとしても、物語的な配列をどのように理解したらよいかという問題は、そのまま残っている。大津皇子歌群の持